

「これからの学校教育と動物飼育」

～飼育活動が育てる子どもの心～

田村 学



1 命を実感する

子どもたちは小さい頃から、「いのちは大事なんだよ」「いのちを大切にしないさい」と繰り返し教えられて育つ。「いのちは大事」ということを言葉では知っている。しかし、どれだけ実感的に理解しているのか。

核家族化が進む中、子どもが人の生や死に直面する機会は少なくなっている。また、自然の中で遊ぶ機会も減り、自然の姿に驚かされたり感動したりすることも少ない。もちろん、動物を飼ったり植物を育てたりすることも少なくなり、責任をもって生命を預かることの重み、大切にしてきた命を失う悲しさ、そうしたかけがえのない経験が少なくなっている。いのちの大切さを頭でわかったつもりでいても、そのことを本当に実感することができないまま大きく成長する子どもの姿がある。

こうした現実の中、子どもが「いのち」をみつめ、感じ、考えることのできる学習の時間が欠かせない。そのためにも、動物を飼育したり、植物を栽培したりする学習活動を行うことを大切にしたい。

2 生活科や総合的な学習の時間における動物飼育や植物栽培と子どもの姿

今回の改訂において、小学校低学年の生活科では、学習指導要領に生命の尊さを実感的に学ぶ観点から、継続的な飼育・栽培を行うことが明記された。このことは、これまでも行われていた生活科における「内容(7)動植物の飼育・栽培」を今まで以上に充実させようとするものの表れといえよう。また、総合的な学習の時間では、学習指導要領解説に学習課題の例として生命の神秘さや不思議さなどを記している。総合的な学習の時間においても、飼育活動や栽培活動を通して、身の回りの問題を本気になって解決していこうとする子どもの姿を具現しようとしている。

このことは、豊かな感性をもち、様々な価値観を形成していく過程にある子どもにとって、生き物にふれ、直接いのちを感じる時間が欠かせないことを物語っている。

3 動物飼育や植物栽培が及ぼす影響

動物を飼育することや植物を栽培する活動が、子どもたちにとってどのような影響があるのかをいくつかの視点から考えてみよう。

(1) 日本生活科・総合的な学習教育学会調査報告書

日本生活科・総合的な学習教育学会では、平成17年2月に「生活科で育った学力について」の調査研究を報告している。この研究では、生活科で行ったどのような体験が記憶に残っているか、どのような力を身に付けているか、生活科に対してどのような思いをもっているかを確認しようとして調査研究を進めたものである。生活科を学んだ小学生、中学生、高校生を対象に、インタビューや質問紙によつ

て調査している。

その中に、「心に残る生活科の活動」を調査したデータがある。50%を超え心に残ると回答された活動は、多い順に次のようになっている。

○「飼育・栽活動」○「学校探検」○「公園や野原での遊び」○「収穫祭」○「昔遊び」

調査対象者別の「心に残る生活科の活動」にも栽培・飼育活動が入っている。

このことから、低学年の子どもにとって、植物を栽培することやその収穫をすること、動物を飼育することなどが強く印象に残り、いつまでも忘れることのできない記憶となっていることが分かる。

(2) 脳科学の知見

最近注目されている脳科学の知見においても、動物飼育などに関する話題がある。

人間の本能には愛着と恐怖という感情がある。恐怖は自己保存の本能であり、愛着は種の保存のための本能といえる。こうした本能以外に、エピソード体験が社会で生活していくために必要な脳の働きを高めていく。特に前頭連合野の神経発達が人として重要である。この前頭連合野の発達は、10歳くらいまでが最も重要な時期であり、いろいろな体験によるエピソード記憶によって形成されるといわれている。

エピソード記憶を培うに必要な体験として、「土、花、木、石、風、水、動物」の七つを上げることができる。すなわち自然体験である。特に、注目すべきは最後の「動物」である。なぜならば、前の六つと比べて「動物」には意志があり、子どもの思うようにできないところがある。子どもがいくら泣きわめいて「ほしい」といっても、動物がそれを許さなければ手に入れることが難しい。これらについては、「動物飼育と教育 第11号」(全国学校飼育動物研究会、平成21年12月)

に詳しいので、参考にさせていただきたい。

(3) 子どもの自信を育てること

生活科で動物を飼育してきた子どもが、それまでの活動を振り返り、次の手紙を書いた。

「お母さん、いつも〇〇を見守ってくれてありがとう。ぼくは、お母さんの手紙を見たら、ちょっと泣いちゃったけど、とてもいい手紙だったよ。お母さんとお父さんが休みの時のとうぼんの仕事を手伝ってくれたから、ぼくはやる気が出てがんばれました。12月3日のおわかれの日まで、ほんとうにありがとう。つらい時も、かなしい時も、うれしい時も、さびしい時も、さむい時も、あつい時も、がんばってのりこえて、やってここまでそだてることができました。いやなことでも進んでやることができました。」

動物をクラスの友達や家族と力を合わせて育て、そこに起きる問題を乗り越え、無事に育て上げることができた自信が手紙の端々から感じられる。この自信は、経験的にも、時間的にも、子どもにとって適度の難易度があったからだと考えることができよう。また、動物を飼育するという活動の性質もあるだろう。どちらにせよ、動物を飼育する活動が適切に行われることにより、子どもが確かな自信をはぐくんでいくことが期待できる。

一方、この自信に関しては、わが国の子どもに十分に育てることができていないという指摘がある。それは、OECDのPISA調査の質問紙調査等の結果にも見ることができる。また、「日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか」(光文社)にも複数のデータが紹介されている。そこには、日本の子どもの自尊感情が低いこと、それも学年を追うごとに下がっていくことなどが指摘されている。

(文部科学省初等中等教育局教科調査官)